

人事院総裁賞の受賞について

当局の職員、上田 稔（本局事業部装金課技能長）が、「長年にわたり美麗・尊厳・品格の諸要素を兼ね備えた勲章・褒章及び金属工芸品等の製造に貢献するとともに、後進の育成を積極的に行い築き上げられてきた卓越した技能と知識の伝承に尽力」を理由に平成29年度 人事院総裁賞（第30回）を受賞することが決定しました。

造幣局においては、平成23年度（第24回）以来、6年ぶり5人目の受賞となりました。

人事院総裁賞の授与式は、明治記念館（東京都港区元赤坂）において平成30年2月7日（水）に行われます。



作業中の上田技能長

人事院総裁賞とは？

人事院総裁賞は、「国民全体の奉仕者としての強い自覚の下に職務に精励し、もって公務及び公務員の役割についての理解と公務に対する信頼を高めることに寄与したと認められる職員又は職域を顕彰する」ことを目的として、昭和63年に創設されました。

受賞者は、各府省等から推薦された候補の中から、選考委員会が選考を行い、その結果に基づき人事院総裁が決定します。

プロフィール



【経 歴】

上田 稔 (うえだ みのる) 61歳

現職：独立行政法人造幣局
装金課技能長

昭和50. 4 大蔵省造幣局に入局

昭和50. 4 装金課仕上係に配属

～

平成19. 4 装金課作業長

平成28. 4 装金課総括作業長

平成29. 4 現職

【顕彰理由】

氏は、現在、国家行事において天皇陛下のみが佩用されている我が国最高位の勲章である「大勲位菊花章頸飾」をはじめ、文化の発達に特に顕著な功績のある方に授与される「文化勲章」や国家及び公共に対する功労のあった方々に授与される全ての勲章・褒章の製造を手掛けている。

勲章等は、国家が与える栄誉を表象する重要なものであり、品質が均一に保持されたうえで、美麗・尊厳・品格の諸要素を兼ね備えたものであることが要求される。

氏は、非常に繊細な手作業が必要とされる仕上工程において、長年にわたり、先人が築き上げた技術の承継のみならず、そこに自らの創意工夫を加え、より高度な技術へと昇華させるために行ってきた不断の努力により培った卓越した技能を遺憾なく発揮し、美麗・尊厳・品格の諸要素を兼ね備えた勲章等の製造に大いに貢献するなど、公務の信頼を高めることに寄与している。

また、氏は、金属工芸品の製品開発にも携わり、梨地加工等高度な微細加工技術が施された製品製造に大きく貢献するとともに、それらの技術の貨幣製造への導入に努め、貨幣の品質及び製造技術の維持・向上に繋げ、その発展に尽力し公共性の確保に貢献している。

氏は、より一層の後進職員の指導育成にも尽力し、これまで培った知識と技能を活かした氏の指導のもと、天皇陛下が国家行事において佩用される「大勲位菊花章頸飾」をはじめとする繊細で高度な技術を要する特別勲章の状態確認・修理を後進職員が行い、期日までに完璧に仕上げるなど、技能伝承に大きく貢献している。

上田 稔さんに聞いてみました！

① 大変名誉のある賞の受賞となりますが、人事院総裁賞の受賞が決定したときの感想は？

この名誉ある人事院総裁賞の受賞を知った時は、大変驚き、飛び上るほどの喜びに包まれました。

自分が一番好きなことを仕事にすることができ、毎日コツコツと勲章や金属工芸品を作り続け、このような名誉ある賞をいただき、私は本当に幸せ者です。

これまで、私を仕事面で育てていただいた造幣局の皆様、そして健康面や精神面で支えてくれた家族に感謝して、この栄誉を受けたいと思います。

② 上田さんが従事している業務の内容を教えてください。

私は、事業部装金課に所属しており、勲章や褒章、金属工芸品（国民栄誉賞、県民栄誉賞など）を製作する業務に従事しています。

装金課には、銀などの材料板に模様をプレスする圧写工程、プレスした部品を糸鋸やマシニングセンタで形に沿って切り抜きやすりで形を整える作業、部品をロウ付け（部品の素材である金属より融点の低い金属（ロウ）に熱を加えて部品間の隙間に溶かしこみ接着すること）する作業、羽布研磨（モーターの軸に羽布を取り付けて高速で回転させ研磨剤を付けた羽布に部品を当てて磨くこと）して小さな傷を取り除いて光沢を出す作業、メッキ作業、組立作業を担当する仕上工程、七宝が入る部品に「ゆう薬」を盛り付けて電気炉で焼き付ける七宝工程があります。

私は、仕上工程を担当し、主に手作業で行う細かな糸鋸作業、やすり作業、ロウ付け作業を担当しています。

③ 上田さんが従事する業務は、高度な技能及び専門的な知識が求められると思いますが、上田さんはどのようにして高度な技能や知識を身につけられたのでしょうか。

私の父が飾り職人（貴金属細工加工工）であったことから、私は糸鋸ややすりが身近にある環境で育ち、自然とモノづくりが好きになり、そして勲章を作りたいという思いから造幣局に入局しました。

私が入局した当時は、ほとんどの勲章が手作業で製作されていたことから糸鋸作業とやすり作業を日々繰り返すことによって手作業の基本を身につけました。

平成2年に一級貴金属装身具製作技能士の資格を取得したことが大きな自信となり、その後は積極的に様々な技能研修に参加して知識と技能を身につけました。

平成15年に東京藝術大学美術学部工芸科鍛金研究室でお世話になった10ヵ月間の研修では、多くの方々と出会い、それまでとは全く違う環境でモノづくりを行い、技術やモノ（作品）の見方、モノづくりの心を学ぶことができたことが非常に良い刺激となりました。

また、外部講師としてお迎えした人間国宝（彫金）の先生から受けた研修では、初めて象嵌（母体となる金属に違う種類の金属を嵌める技法）を学び、高度な手作業の伝統技術も身につけました。

④ 日々の業務の中で苦労されている点や留意されている点を教えてください。

勲章や褒章は、国家又は公共に対し功労のある方などが着用されるものであることから、着用時に部品の接合部が外れないよう細心の注意を払って一つ一つ心を込めて製作しています。

私が今一番気に掛けていることは、後輩職員に技能を伝承することです。近年では機械化が進み、手作業で製作する勲章の数量が減少しており、糸鋸作業ややすり作業を経験する機会が減少しているため、手作業

の基本を習得することが非常に難しい状況になっています。

大勲位菊花章頸飾や文化勲章など複雑な手作業を要する勲章は、糸鋸やヤスリの基本技能を確実に習得していなければ製作できないことから、私が業務や研修で経験して習得した知識や技能を少しでも多くの後輩職員に伝承していきたいと考えています。

⑤ 上田さんが業務を通じてやりがいを感じられるのは、どのようなことでしょうか。

春秋の叙勲や文化の日の叙勲のニュース等で勲章を授与された方々の笑顔と着用されている勲章を拝見したときにやりがいを感じます。

大勲位菊花章頸飾は、唯一22金（金の割合が24分の22である合金）を材料として使用し、明治時代から変わらない日本の伝統技法を用いて製作します。多くの部品から構成されていることから多くの時間と手間を要するため、無事に完成したときは感慨深いものがあります。

⑥ 最後に国民の皆様へメッセージをお願いします。

勲章や金属工芸品の製造に従事する者として、初めて人事院総裁賞をいただいたことに大変感謝しております。

造幣局で貨幣を製造していることは、国民の皆様もよくご存じのことと思いますが、勲章や金属工芸品も造幣局で製作していることを知っていただける良い機会になったと思います。

私は、平成29年3月に定年退職し、現在は再任用職員として勲章などの製作に携わっていますが、残された時間は国民の皆様への期待に応えられるよう、後輩職員に知識と技能を伝承し、日本の伝統技法を守り、世界に誇れる貨幣と勲章を製作する「ものづくり造幣局」の一員として貢献できるよう努めていく所存です。